

2025年9月10日

立教大学国際学術研究交流制度
2025年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	文学部・教授
氏名	浦野 聡
派遣機関名	Advanced Technology Research and Application Center, Selçuk University 所在国：トルコ
研究テーマ	トルコ共和国アフィオンカラヒサル県ボルバディン町ハジュ・ムラト遺跡における古代都市ポリボトス中心公共空間の地形形成学・考古学調査
派遣期間	2025年7月24日～2025年8月23日（31日間）
研究経費	762,380円

2. 派遣期間中の活動

離日日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例）〇〇に関する調査、〇〇氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2025年7月24日	離日
2025年7月25日	スレイマンデミレル大学にて、研究協力者の Yunus Bozkurt 氏と研究討議。採取試料からのサンプルづくり打ち合わせ
2025年7月26日	ドゥラ・イェリ遺跡にて、基準点設定。基準点の GIS データ取得
2025年7月28日	ドゥラ・イェリ遺跡にて、3m×4mの試掘開始（8月23日まで継続）
2025年9月1日	帰国（私費による滞在延長）

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

まず、スレイマンデミレル大学における、2020年度採取、エベル湖湖底土壌採取試料からのサンプルづくりであるが、これは、弘前大学小岩直人教授の研究室にて行うべき、土壌試料の粒度分析のために行った事前準備作業である。2センチ刻みで各10グラムのサンプルを60点採取し、その粒度分析によって、過去の地震等、地殻変動の有無を探るためのそれであった。8月中に税関弘前支部に届くように手はずを整えた。

次いで、ドゥラ・イエリ遺跡中心部、3×4mの試掘であるが、地表面から60cmのところまでビザンツ中期の住居跡が出土し、120cmのところからローマ帝政期～古代末期の、版築を施した硬い地表面上に築かれた炉跡と地中に三分の一ほど埋め込む形で設置されたチーズ製造用のアンフォラ型壺を発見した。その上部には、瓦や雨どいなどの建築部材が散乱しており、6世紀の大地震の痕跡であった可能性があることが判明した。

さらに、8月中旬より、試掘範囲の東半分について、さらに深く掘り進めることとした。その結果、地表面から2m近い層位から火葬墓1基が、また3mを超える層位から、巨大な甕棺墓2基が発見された。これらのうち少なくとも甕棺墓は、年代測定分析にかけてみるまで正確なことは分からないながら、青銅器時代中期の墓であろうと推定されている。ローマ時代の層位と青銅器時代の層位の間には、人間の居住の痕跡はみつからなかった。まだ試掘段階であるので、発掘範囲を広げた場合に想定が維持しうるかどうかは不明ながら、さしあたり、青銅器時代には、この場所は、巨大な墓地であったと想定される。青銅器時代の墓地とローマ時代以降の住居跡との間には、連続性は認められず、青銅器時代の墓地を全面的に発掘するためには、ローマ時代以降の遺構を大幅に破壊・撤去しなければならないことから、プロジェクト全体の方向性としては、ローマ時代以降の発掘を優先すべきとの暫定的結論を得た。

なお、私が参加させていただいたプロジェクトは、発掘調査地点から4km東にあるウチホユクという青銅器時代の居住地遺跡発掘プロジェクトの一環であり、セルチュク大学のオズデミル・コチャク教授が代表者を務めている。このプロジェクト（「ウチホユクおよび周辺遺跡の発掘調査」）は、現地のアフイオン・カラヒサル県、およびボルバディン市、セルチュク大学の全面的支援の元、エクスカベーションハウスを用意されており、私自身も、立教大学の学生3名とともに、無償で宿舍と食事を用意された。このエクスカベーションハウスには、トルコ全土から、ウチホユク遺跡発掘に携わる大学院生、学生、研究者が常時10名以上滞在しており、寝食を共にしつつ、毎日の発掘物について討議を重ね、交流を深めることができている。

来年度以降については、ドゥラ・イエリ遺跡の、古代ローマ期の劇場、浴場、聖域（その一部が今回の試掘範囲）、ビザンツ期の教会、宮殿の発掘を行うため、コチャク教授らと、トルコ政府の「未来への遺産」プロジェクトに応募すると同時に、今回の試掘範囲をさらに拡げ、聖域地区の発掘を本格化するため科研費の基盤Bへの応募もすでに行っており、ドゥラ・イエリ遺跡（150ha）全体の範囲を覆い尽くしていたと考えられる古代・中世都市ポリボトスの発掘作業を本格化する計画を立てている。

なお、現地通信社アナドル通信から取材も受け、本学からの参加学生のコメントがトルコ語のみならず英語で世界配信された。現地では、日本の大学生からの参加を大いに歓迎する暖かい雰囲気を作られており、今後とも、本学文学部史学科の学生を中心に、毎年、参加者を募り、トルコの考古学科や史学科の学生・院生・教員たちとの協働を推進していく素地が整った。

